

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

錬金術師のIS学園生活

【作者名】

アシモフ

【あらすじ】

鋼の錬金術師のエドワードエルリックがIS学園に行く話です

第1話

鋼の錬金術師、エドワード・エルリックは、真理の扉と似たような場所に居た

上は青空、下は海で、全く真理の扉とは似ていないのだが、何故か似ている、と感じてしまう

「……、何処だ？」

その問いに答えてくれる者はいない

周りを見渡しても、ただただ青い空ととても澄んだ海が広がっているだけ

「ん？ちょっと待て、俺、なんで海の上に立ててんだ?!」

すぐに自分の足元を確認、やはり海

不死に近いホムンクルスを相手にしてきたエドでも、海の上を立つなんてことは出来ない

足元を触ってみる。冷たい。

おかしい、自分の状況が、分からない

その分からないが、エドの好奇心をくすぐる

もつとよく調べようと、後ろを向く

すると、小さな女の子がこちらを見ていた

「さっき、周り確認したよな？」

とりあえず、分からない事だらけなので、少女に話掛ける

「なあ、「ここが何処だか知らないか？」

少女は答えない

ただ、ジツとこちらを見つめている

エドは質問を続ける

「なんで俺らは水の上に立っていられるんだ？君の名前は？」

少女は答えない

相変わらずジツと見ていたが、ふと、笑った様な気がした
すると、少女はエドから視線を外し、回れ右をして歩きだす

「え、あ、おい！」

追いかけてよとしようとするが、何故か身体が動かない
急激な睡魔が身体を襲う

「く、そ」

少女をの姿がだんだん小さくなっていく
すると、少女が顔だけ振り向かせて、何かを言っていた

しかし、エドはそれを聞き取れず、眠ってしまっ

る
少女はしばらくエドを見ていたが、顔を元に戻し、また歩きはじめる

————— 待ってる

「…」

眠りから覚めた俺は、だんだんと先程までの出来事を思い出して
く

「夢、か」

よく考えれば当たり前だな、と考えつつ、最後に少女が発していた
言葉が気になる

「…ん？」

辺りが暗くてよくわからない
なんかの倉庫か？

すると、いきなりライトが俺を照らす

「おい…貴様、ここで何をしている…」

ライトで俺を照らしていたのは女性だった

…拳銃持ってる

怖い

「答える！ここで何をしている！」

「いや、俺もよく状況が…ここ何処？」

とりあえず攻撃の意思は無いというのを示す為、両手を上に上げる

「侵入してきたんだから分かるだろ…ここはIS学園だ」

「IS学園？聞かない場所だな」

「は？IS学園を知らないのか？」

「うん」

「…ISは知っているだろう、その専門学校だ」

「いや、ISも知らないんだけど…」

「なんだと？貴様、出身地は何処だ」

「リゼンブール、鋼の錬金術師って言えば結構知られてると思うけど」

ていつか、俺どっやってここに来たんだ？

確か世界を旅しに出るってなって、それからウィンリィに、「告つて…電車の中で寝てたんだ

で、起きたら…」？

「聞いたこともないな…」

いや、確かに今もう錬金術使えないし国家錬金術師じゃないけどさ…分かり易いじゃん？

俺に銃口を向けてる女の人が、何か考えてる

「おい、ちょっと両手を壁につける」

壁つたって…暗くて見えないんだけど

…こちら辺か？

すると、俺の脳の中に無数の情報が流れこんでくる
その情報量の多さに思わず目をつむってしまう
しばらくすると、その感覚も収まり、目を開ける

すると、視界が少し高くなっていた

「なっ!? 貴様、ISが動かせるのか!？」

「え、これがISなのか?」

「…詳しく話を聞かせてもらおうぞ」

…いや、俺なんもわかってないんだけど

「…というわけなんだよ」

「成る程…」

この侵入者から話を聞くと、どうやらこいつは、違う世界から来たらしい

普通なら嘘だと確信出来るが、私、織斑千冬はこいつの話信じていた

根拠は三つ

まず、こいつは武器を持ってなければ、何も持っていなかった
こんな状態でIS学園に侵入出来るはずがない

二つ目

こいつの言ってる事だ

ISを知らないなど、この世界ではあり得ない

もし私が侵入して見つかったとしたら、もっとマシな嘘をつく

言ってる事があまりにもフィクション過ぎて、それが逆に信用させる

そして最後

勘だ

「…分かった。なら、IS学園で生活してみないか？どうせ行く場所もないんだからな」

「…え？いいのか？」

「ああ、お前はISを動かせる貴重な男だからな。お前には、IS学園生徒として、10日後の入学式から学校に通ってもらおう」

「げ、学校か…」

「とりあえず、ISについての本と、こちらの世界についての事が書かれている物を渡そう。それでこちらの世界のことを勉強してくれ」

「え、マジで!？」

そう言った侵入者の顔は、まるで新しいおもちゃを買ってもらった子供のようだった

「そういうえば、名前を聞いていなかったな、私は織斑千冬だ。お前は」
「？」

私がそう聞いて手を前に出すと、彼は私の手を握りこぼした

「……………エドワード・エルリックだ。よろしく、千冬」

2話

「おお……」

ISに関しての本や、この世界についての本が読みたいとエドが願ったところ、千冬に連れて来られたのは資料室だった

普通なら図書室では？と思う所もあるのだが、ISの事に関する本、この世界についての本、つまり昔の事について載っている歴史本、近代の事に関しては新聞などが揃っている資料室の方がいい為、ここに連れて来たらしい

「すつ…げえ…」

資料室は本や雑誌、新聞が沢山あるため、とても広い
探求心が強いエドにとってそこは、遊園地の様な場所だった

「では、私はまだ見回りが残っているのな。また後でくる」

「ああ、ありがとう」

エドはそれだけ言うと、近くにあった本を手に取り、読み始める
その集中力は、見ているだけでも伝わってきた

そんな光景を見て、千冬は出来るだけ音を立てずに出て行く

「あ、織斑先生！何処に行ってたんですか？探しましたよ」

「ああ、山田先生。すまない、少し野暮用でな。それと、今年の新入生、
1人追加だ。」

「ええっ!? そんな、部屋割りやっとな終わったのに…」

見回りが終わり、私は今山田先生と資料室の前にいる

資料室はカードを差し込まないと開かない仕組みになっているので、カードを差し込み、中に入る

すると、中には未だに本を読んでいるエドワードがいた

「織斑先生。彼が…?」

「ああ、そうだ。おい、エドワード、今日はもうここを閉めるから、読む本だけ持っていけ」

エドワードからの返事はない

ただ、無視しているという訳ではないのだろう、本から目を離さずに、とても集中しているのが伝わってくる

「彼、すごい集中力ですね…。ちっちゃいのに」

ブチッ！と何かが切れた音が聞こえた

「誰が下を見なきゃ見つけれない程小さい豆粒ドチビかああああ

!!!

「キヤアアアアアア」めなないいいい!!」

いきなり飛び上がるエドワード
それに驚く山田先生

「って、千冬と、誰？」

気づいてないのにキレたのか……。どうやらエドワードにとって身長の事はタブーらしい

「こちらは、この教師の山田先生だ。それと、今日はここをもつ閉めるのでな、必要な本だけ持っておけ」

「あ、ああ、分かった。エドワード・エルリックです。よろしく」

「あ、ハイ、よろしくお願いします」

先程との態度の違いでか、山田先生は目をパチクリさせながらエドワードが差し出していた手をとる

「さて、では部屋は何号室にすればいいかな？山田先生」

「あ、そうですね。とりあえずは空き部屋を使って貰いましょう。ここにさしあげます」

そして3日後

「まさかたったの3日で全て読み終えてしまうとは…」

そう、私の目の前にいる男、エドワード・エルリックは、たったの3日間で、資料室の本について全て覚えてしまった

資料室には技術的な本もあったので、知識だけならそこらへんの科
学者にもひけをとらないだろう

「ああ、にしても、この篠ノ之博士？は何でISをこんな欠陥機にした
んだろうな？」

「ん？欠陥機にしたんじゃないかって、欠陥機になったんじゃないのか？」

「いや、そんな事はないんだよ。ここまで完成している理論が組み
れているのに、何故か男が乗れないように難しくしてあるんだよか」

ブルルルルルッ！

イキナリ私の電話が鳴る

誰だ一体…

「着信 篠ノ之束」

ブチッ！

「ぶっ…」

「え、ちよ、電話は？」

「いいんだ、ほっておけば」

プルルルルルル!!!

「うるさい！なんだ!!」

『ちーちゃん私の名前見た瞬間切るってどういうこと!? ってそれよ
り、そいつと変わって!!』

「なんだイキナリ…他人に興味を示すなんて、珍しいじゃないか」

『今さっきの発言を聞いてたんだよ！そいつにかわって!』

「分かった分かった…たくっエドワード、お前に電話だ」

「え？俺に？誰から？」

「話せば分かる」

そう言って私は、エドワードに携帯電話を投げる

そのまま私は資料室の外に出て、自販機をさがしに行く

自販機で飲み物を買って、資料室に帰ってみると、何やらカオスな

状態が出来上がっていた

何故か槍を手にもつエドワードと、変形した壁

「な、何があった？」

「いや、束さんの電話が終わって、なんかIS作ってくれてるってなって、前に話した錬金術使えれば使い捨て様の武器いくらでも作れるなーって思っ、前と同じように壁に手を置いたら、出来た」

「…は？」

言っている事が理解できなかった

確かに錬金術の話は聞いた

だが、流石にそれは信じてなくて、私は嘘だと思っていたけれど、まさか本当だとは…

プルルルルッ！

「…もじもじ」

『何今の!? ちょっと束さんに詳しく…!!』

その後私とエドワードは、しばらく硬直していた

第3話

「エドワード、今日は買い物に行くぞ」

資料室の本も読み終わり、暇を持て余していた俺に声を掛けたのは、俺がこの世界に来てから初めて知り合った織斑千冬だった

…いや、まだ知り合い千冬と山田先生だけだけど…

「え？買い物？俺外出ていいのか？」

「なんだ、駄目だと思っていたのか？別にIS学園はそこまで厳しくないぞ第一、まだお前は正式に生徒ではないしな」

「いや、だって、世界で二人目の男性IS操縦者なんでしょ？俺」

「ああ、そういうことか。安心しろ、お前の存在はまだ正式には発表していないから、お前が二人目だと気づく奴なんていないさ」

そうだったのか…じゃあ入学式の時大変じゃね？俺

「早く準備しろ。準備が出来次第出かけるのでな」

「りょーかい」

「うし、行くか!!」

準備が整った俺は、千冬の元へ行き、IS学園の外へと出ようとしていた

…よくよく考えたら、俺は今日初めてこの世界の街に行くんだよな

…

テンションが少しずつ上がっていく

「な、なあ、こつちの世界には、向こうにはなかった物が沢山あるんだよな?」

「ん?まあな。だからと言って、なんでもかんでも買わんぞ。あと、あまり商品に夢中になり過ぎて迷子になったりするなよ?」

「しねーよ!千冬は俺の母さんか!!」

「ふふ、冗談だ。では、行こう。ああ、分かっていると思うが、絶対に外では錬金術は使っなよ」

「わかってるよ…」

どつちやら、IS学園から街まで行くのにはモノレールに乗らなくてはいけないらしい

モノレールに10分は乗っただろうつか、どつちやら降りるらしい

「まずは洋服からだな」

そう言われ、俺は千冬に連れ込まれた洋服専門店に来ていた
しかし、中は殆ど女性物ばかりで、男性物のは肩身狭しと置いて
あった

「…新聞とかで見たけど、まさかここまで女尊男卑が酷いとは…」

「これでもまだマシな方を選んだつもりだったんだが…すまない、違
う店にするか？」

「いや、ここでもいいよ。悪い」

言い忘れていたが、俺には金は無い

なので、ここでの支払いは、全て千冬持ちになる

「何を今更。気にするな」

その後、俺は千冬に服を選んで貰い、5着程購入した
服を選んだ後も、電気屋、家具屋、武器屋（何故連れて来られたの
かわからない…）等、色々なところをまわった

「さて、次は…」

「な、なあ、昼飯にしないか？俺、腹減っちゃってさ…」

このままだと終わりそうにないので、とりあえず一時的な回避方法
として昼食を提案する

ちよつどいい時間帯だしな

「ああ、もう12時をまわっていたか。よし、では、適当なところに入る。」

そう言っただけで俺と千冬が入ったのは、ちょっとお洒落なレストランだった

そこでメニューを注文したところで、事件は起きた

「動くんじゃねえ!!全員、その場から動くな!!」

レストランの入り口付近から、男の声が聞こえてくる

「動いたら…」

バァン!

うるさく響いたのは、発砲音

「これを当てるぜ」

ガチャン!と、次の弾が装填される音が響く
立て籠もりかよ…!よりもよってついてない
まさか出かけた日にこんな事が起きるとは…!

「千冬、行けるか?」

俺は立て籠もり犯達を迎撃するという意味で、千冬に聞いた

「ああ、任せろ。お前は左から頼む。私は右から行く」

千冬もどつやら意味を理解してくれたらしい

「了解。じゃあ、行くぞ。3、2、1…」

バツ！と2人で同時に飛び出す

それに男達が気付いて、此方に銃口を向ける

俺は近くにあった鉄製のトレイを片手に、水入りのコップを片手に持ち、トレイを相手の銃口の向いてる頭に置く

キーン！と変な音が響く

「危なっ!？」

そのまま相手の方向に突っ込んで行き、コップを投げる

相手に見事に当たり、顔面が濡れる

「おりゃー!？」

その隙に相手の懐に入り、相手の顎を吹き飛ばす

拳銃だけ抜き取り、もう一人の方へ向かう

「くっ!このチビが…ッ!？」

…うん、こいつ殺そう

フルボッコにしてやる

「誰が豆粒どちびかああ!!!」

「そこまで言っていないブヘッ!!」

片手に持っていたトレイを投げつけ、相手の顔面にヒットすかさずライダーキックをかます

そのまま相手の顔面に着地。気を失った模様。

Bannon!!

「うおっ!!」

弾が頬を掠める

どつやら最後の一人っばい

「ほれ」

俺は相手から奪った拳銃を上には上げる

すると、相手の視線は見事にそちらに釣られ、俺から逸れた

その間に相手に近づき、キン キをくれてやる

「うっ!!」

…敵ながら可哀想に思えてきた

やりすぎたか?

千冬の方は終わってるかと後ろを見てみると、予想通り終わって
いた

しかし、まだ気を失っていなかった男が、千冬に銃口を向ける

「千冬!!あぶねえ!!」

くそっ!!この距離じゃ止められねえ!!

仕方無い…千冬に駄目だと言われてたけど…これしかないッ!!

俺は両の手を合わせ地面に叩きつける

Bannon!!

「千冬!!あぶねえ!!」

エドワードの声で振り向いた私は、現状を理解する

しまった...!一人まだ気絶してなかったか!!

撃たれると覚悟を決め、顔の前で腕をクロスさせて防御の体制をとっていたが、いつまで経っても弾が来ない

なんだと思って目を引く開けると、私と犯人との間に、壁が出来ていた

...これは...エドワードの仕業か...全く、使うなと言っておいたのに

...

「あつぶねえ危機一発!」

「馬鹿者、お前、これは言い逃れ出来んぞ?」

「...ですよね」

...まあ、私を庇ってくれたんだし、お礼くらい言った方がいいのか

「その、まあ、なんだ…その…ありがとう…」

…何故だか分からないが、お礼を言うだけなのに、とても心臓の動きが早かったのは墓場まで持って行く秘密だ

設定をしばしば…

今回のこの物語は、インフィニットストラトスと、鋼の錬金術師のクロスオーバーです

世界はインフィニットストラトスで、主人公は鋼の錬金術師のエドワード・エルリックになります

鋼の錬金術師側からは、今のところエドワード以外に出す予定はありません

けれど、もしかしたら出すかもしれません

では、登場人物の紹介です

エドワード・エルリック

設定としては、原作終了後のエドです

ただし、身長などは原作終了後ではなく、原作中の身長としています。(ただ単に身長ネタがやりたかっただけです…)

後は、錬金術を使えなくなっただけですが、ISの世界では錬金術が使えます

そのことをエド自身も不思議に思っていて、何故使えるのかについての話をオリジナルで作るつもりでいます

左足の機械鎧(オートメール)の整備は、ISの生みの親、篠ノ之束にもらうという事にしました

因みに、専用機はまだ決めてませんが、鋼の錬金術師に関連ある名前にしようかなと考えてます

何か意見があったら教えてくださいm(ー)ー)m

因みに、織斑千冬達には錬金術の事に関しては話話しましたが、自分達がやってしまった事に関しては話してません

織斑千冬

ISの主人公、織斑一夏の姉です

一応、ISの世界の中で、最もエドワードに近い人物にしようかなと考えています

あと、千冬はISに乗れない設定にしようとも考えています

千冬が何故ISに乗れなくなったのか、というのも、オリジナルストーリーとして作っていききたいです

山田麻耶

IS学園の1年1組の先生です

織斑千冬の後輩で、ロリ巨乳の眼鏡っ娘です

エドワードの知り合い第二号ですね

次に、場所の設定です

真理の扉に似た場所

これは、一夏君がISと喋った場所です

真理の扉に似た場所にした訳は、後で物語に関わってくるからです

ここから先は、ぶっちゃけネタバレです

この物語では、ISの世界にも真理の扉の様な場所がある設定です
エドワードが右手左足、アルフォンスが身体全体を失くした理由は、人が侵してはならない神の領域とやらに踏み込んだからでしたが、ISの方も、神の領域に踏み込もうとした者を出そうと考えています

一応、考えているのは、

織斑千冬です

織斑千冬が神の領域に行こうとしたのは、ISの事に関してです

しかし、そのせいで千冬はISに乗れなくなった、という展開を作ろうと思っています

4話

俺が錬金術を使ってしまった後は大変だった

外にはいつの間にか警察や報道局が集まっていて、逃げられる様な
逃げる事は出来ない

「やべえ…どっしりよ…」

「考えて無かったのかお前は…仕方ない、お前が錬金術を使ったのは
私が原因でもあるしな…私に任せろ」

「任せろ…たつて何を…おい、千冬…?」

俺が言い終える前に、千冬が外の警察や報道陣の方に出て行く

「出てきたぞ…!」

「おい、カメラ回せカメラ!!」

「皆さん、落ち着いてください。ここを襲った立て籠り犯達は、全員鎮
圧しました」

それを聞いた警察達は、すぐさまレストランの中へと入っていく
しかし、報道陣はそうではないようで、千冬の方にとずっと質問を浴
びせていた

「一体誰が鎮圧させたんですか?!」

「私と、もう1人の男です」

「では、そのもう1人の男は何処にいるんですか!？」

そう言われ、千冬が此方をみて手招きしている

来いと言ってたんだよな…?」

俺がしぶしぶ千冬の方に歩いていくと、またもや質問の嵐がくる

「その人と貴方で犯人達を鎮圧させたんですか!？」

「そうです。そして、身勝手ですみませんが、その方が都合がいいので」
「」で言っておきます」

千冬はそこで言葉を終え、一呼吸おくと、言葉が続けた

「彼は、2人目の男性IIS操縦者です」

一言。

しかし、その一言が、どれ程の世界中の人たちを驚かせただろう
先程の非では無い程の質問の嵐が来る

「そ、それは本当なんですか!？」

「彼は何処の国の所属なんですか!？」

「IIS学園側はこの事を知っているんですか!？」

「彼は何歳なんですか!？見たところ高校生には見えませんか!？」

余りに質問の量が多すぎて、俺が聞き取れたのはこの4つだけだっ
た

…最後の、俺がチビだって言いたいんだよな？

「誰が」詳しい事は、後日会見の場を設けますので、そこで説明いたします。では、警察の事情聴取を受けてきますので、これで」

千冬は俺の口を抑えて、片腕で持ち上げて報道陣の質問に答え、警察の方へと歩いていく

「ムー！ムー！（千冬ー！！はなせー！！）」

「うるさいぞ。我慢しろ」

「ムー！ムー！」

そしてその後、会見では、記者からの「店内に出来たあの壁はどのようなに仕上がったのですか？」という質問に対して、「このエドワード・エルリック君は、錬金術というものが使えます。それを使ってありませんでした。実際に目で見た方が早いでしょう」と答えた千冬

そのまま俺の方を見る千冬

お前…！なんでそういうの話すんだよ…！隠しといてもよかっただろ…！

が、もう後にも先にも後戻りは出来ないのです、諦めてマイクをスピーカーに変える

そのあとの記者達への対応が本気で疲れた

そして現在

「…はあ…」

俺は今、1年1組の教室の中にいる

周りは女子、女子、女子

唯一千冬の弟の織斑一夏が俺の隣にいるけど、その一夏でさえ此方を見ている

「えー、新入生の皆さん、入学おめでとつございます！」

生徒達は黙っている

「え、えっと…」

ほら見る、山田先生泣きそうになつてんぞ

誰か！反応してあげて！

「えっと…あーそつだ、皆さんニュースで知っているとと思いますが、急遽ISS学園に入学する事がきまつた、エドワード・エルリック君です！エドワード君、挨拶お願い出来ますか？」

俺にふりやがった！酷いなこの先生！

「ねえ、あれが錬金術使いの？」

「結構イケメンじゃない？」

「えー、でも…」

周りの女子達が一気にざわめきだつ

「え、エドワード・エルリックです…よ、よろしく」

最後にぎこちない笑顔も忘れずにつけてやった
他の人達からの視線が痛い

「…以上です」

全員が一斉にコケる。漫才？

パン！

「いだっ！」

何かが俺の後頭部にヒットした

「つてえな…千冬！」

誰がやったのかはもう分かっていたので、特に驚く事なく俺を叩いた千冬を威嚇する

パン！

「二発目っ!?!」

「学校では織斑先生だ。馬鹿者」

俺のIS学園生活は、波乱の幕開けだった

5話

「あいつが…エドワード・エルリック…」

俺、織斑一夏は、エドワード・エルリックが来たのを見て、心の中でそう呟いた

世間では、エドワード・エルリックは、ヒーローみたいな存在だった

ブリュンヒルデとして名を世界中に名を轟かせた俺の姉、織斑千冬と共に立てこもり犯を退治し、錬金術という凄い力を持っているらしい

しかも、男には乗れない筈のISに乗れる2人目の男性操縦者だ

最初エドワードの存在を知った時は、ただ単純に嬉しかった
何せISが使える男仲間が出来たんだから

でも、エドワードが立てこもり犯を倒してる時の映像を見て、俺もあいつを俺の中のヒーロー像と重ねていた

だから、俺はあいつの事が少し気になっていた

…いや、そういう意味じゃないぞ？うんホントに

どういつ奴なのか知りたかったんだ

なので、今から話掛けようと思う

「よっ、TV見たぞ。凄いな！立てこもり犯を退治なんて！あ、俺は織斑一夏。一夏でいいぜ」

いきなり話掛けた俺に少し戸惑った様子のエドワードだったが、すぐに落ち着いて、俺に顔を向けて喋った

「ああ、TVは大袈裟なんだよ…。俺はエドワード・エルリック。俺の事もエドでいいよ」

「おう、よろしくなエドー。同じ男同士仲良くやってこっつぜー」

そう言って握手を求める俺

周りの女子達が何か喋っているけど、気にしない、気にしたら負けだ

「ああ、よろしく」

そう言って握手した右手は、少し弱々しかったけれど、しっかりと俺の手を握っていた

すると、俺の横から声が掛かる

「すまない…ちょっといいか？」

…一夏…お前がポニーテールの子に連れて行かれてから他の奴からの視線が痛いぜ…

出来る限り視線を合わせないように机に突っ伏しているけど

「ねえ、あれがTVに出てた人でしょ？」

「そうそう！錬金術っていうの使えるらしいよ…」

「でも、それにしては…」

話声が聞こえるけど、無視だ無視。

あーあー聞こえなーい！

「ちょっと、よろしくって？」

あー聞こえなーい聞こえなーい！！

「ちょっと、聞こえてますの?!」

聞こえなーい聞こえなーい聞こえなーい！！

「机に突っ伏している貴方ですわよ!!」

やっぱり俺かよ…

これ以上やると、本気で怒りそうなので、顔を向ける

「ハイハイ…なんですか？」

とてつもなくダルそうに聞く

「全く、コレだから男は……このイギリス代表候補生の私が話掛けてさしあげてますのに、何ですその返事は!?!」

確かこいつは…セシリアオルコットだっけ?

イギリス代表候補生の

ヒステリックだな

「いやあ〜はっは申し訳ない。で、何の様?」

俺がそう聞くと、眉をピクピクさせるイギリス代表候補生さん

「貴方…私の事馬鹿にしているでしょう…?」

「いや、別に」

「このッ…! 『キーンコーンカーンコーン』くっ、また後で来ますわ! 覚えてなさい!」

悪役がやられた時の様な台詞を吐いて何処かへ行ったイギリス代表候補生

…また後で来るのかよ…

「授業を始める前に、クラス代表を決めるぞ。自薦、他薦あるものは手を挙げる」

千冬の声が教室に響く

「ハイ！織斑君がいいと思いますー！」

クラスの女子から推薦の声が挙がる

それをキツカケに、他の女子達も「さんせー！」「やっぱり男子がいるんだし！」と、どんどん推薦の声が挙がっていった

「俺?!」

「ハイハイ！私はエドワード君を推薦しますー！」

今まで俺は関係ねーやとボ〜としていたエドワードを推薦する声も挙がる

「俺もエドがいいと思いますー！」

それに便乗して一夏がエドワードに押し付けようとする

「なっ!?おい、てめ、一夏!!」

エドワードは、自分が推薦されるとは微塵も思ってたので、一夏やクラスの皆の発言に異議を唱えようとするが、それよりも先に、自分を陥れようとした一夏に仕返しをしてやるつもりを考える

「なら、俺は一夏を推薦しますー！」

「おいー！」

一夏も一夏で、自分のやった事をそのまま返されるとは思っていなかったので、エドワードに異議を唱えようとする

が、その時、バンッ！と、机を叩く音が教室に響く

「納得がいきませんわ!!!」

音の元凶は、セシリアだった

「男がクラスの代表なんて、いい恥さらしですわ!!このセシリアオルコットにそのような恥辱を一年間も味わえというのですか?!大体、文化としても後進的なこの極東の地で暮らさなければいけない事自体屈辱だというのに…!!」

これに怒ったのは一夏と、意外にもエドワードだった

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一飯が不味い国で何年覇者だよ」

「なっ!?貴方、私の祖国を馬鹿にしますの!?!」

「ここが嫌なら帰れよ。お嬢様。俺はこの場所住みやすくて好きだけどな。あと、ISの生みの親篠ノ之束博士は日本で生まれてる。ISの専門学校も日本のIS学園だけだ。で、お前は後進的な国が作ったISに乗り、ISを習うためにわざわざ後進的な国に来たんだな?自分の国でやれよ。お前の国の文化は進んでんだろ?」

エドワードに正論を言われ、押し黙るセシリア

「くっ…!!決闘ですわ!!」

「おう、いいぜ。四の五の言っより分かりやすい」

「嫌だ」

セシリアの言葉にかえってきたのは賛成と拒否

「よし、なら一週間後にオルコット、織斑、エドワードの3人で試合をする」

「え？俺嫌って言ったんですが？」

「知らん。やね」

千冬の横暴な態度に頂垂れるエドワード

「叩き潰してやりますわ…ッ!!」

セシリアとの対戦は、一週間後となった

6話

「お願いします」

「ダメだ」

「…お願いします」

「ダメだ」

「……お願い「ダメだ」」

「お・ね・が・い・し・ま・す!!」

「ダ・メ・だ!」

はあ…あの2人、この会話何回したんでしょうか…

思わずため息が出てしまいます

どうやら、エドワード君は、クラス代表を決める試合に出たくないようで、自分を試合に出さないでくれと頼みに来ているようです

それを、織斑先生が却下し続けているので、どうしても会話が終わりません

…ソロソロ止めた方がいいのでしょうか? いや、でも…

「や、山田先生…あの2人を止めてもらえますか…?」

止めた方がいいと考えていたら私が他の先生に頼まれちゃいました
た

退路を塞がれました…か、覚悟を決めるしか…

「ガールルルッ!!」

やっぱり無理です！なんであんな風になるんですか！！怖いです！
2人共珍獣化してます!!

「や、山田先生…は、早く…」

他の先生達は机に隠れて頭だけヒョコツとだし、私に2人を止める
よう頼んできます

私は再度覚悟を決めて、2人に話しかけます

「あ、あのぉ、エドワード君、織斑先生…」

「ハイ!?」「ギロツ！」

「ヒィッ!?」

ダメです。あの2人、怖すぎです。

と、その時、職員室のドアがガラツと音を立てて、開きました
入ってきたのは…オルコットさんでした

ああ、救いの手が…と思っていたら、ドアが閉まりました

…オルコットさああああああん!!

2人が職員室で睨み合っている時、セシリアもまた職員室のドアの前にいた

理由は、アリーナの使用許可を貰う為

2人が職員室で珍獣化していると梅雨知らず、セシリアは職員室のドアを開ける

「失礼します」

「「ああ？」」「ギロリ

「…失礼しました」

ピシャッと、開けたドアをすぐ閉めるセシリア

「…場所を間違えた様ですわね。さて、職員室は…」

「オ、オルコットさん!!」

「山田先生…職員室はどちらに?」

「じ、ここです!! 助けてください!!」

やはりここは職員室でしたか…と心の中で地面に手を着けるセシリア

しかし、山田先生の助けてというのがよくわからない

「それで、何かありましたか?、私はアリーナの使用許可を貰いにきたのですが」

「あ、それなら織斑先生が…」

「織斑先生ですわね、分かりましたわ」

「あ、でも今は…」

山田先生の声を無視して、セシリアは再度職員室のドアを開ける

「失礼します。織斑先生はおられますか？」

「なんだ？オルコット。私は今立て込んでいる」

目ではエドワードと睨み合ったまま、オルコットに話掛ける

「アリーナの使用許可を貰いに来たのですが…」

「何？ふむ、練習か。感心だな、何処かの誰かとは違って…なあエドワード？」

「俺が嫌なのは試合するのがっていうだけで、別に練習が嫌なんてひどいとも言ってませんよ織斑先生え…」

試合が嫌だ

その言葉に、セシリアは反応する

やはり男は、と失望する

「試合が嫌だ？ふん、やはり貴方も口先だけの腑抜けだったのですわね。身長と一緒に心まで小さいのかしら」

ビキッ!!

辺りの空気が凍る

セシリアが、エドワードに最も言うてはならない事を言ってしまった

「ぶぶ、フフフフフフ」

エドワードが不気味に笑う

さっきまで睨み合っていた千冬ですら冷汗をかきはじめる

「ど、とうした？エドワード？」

「千冬、いや、織斑先生。俺、試合出ます。けど一番最初に、こいつとやらせて下さい」

完全に作ったスマイルで千冬に話しかけるエドワード

「わ、分かった…」

「ぶ、ぶフ、フフフフフフ。おい、オルコット？お前、泣いても終わらないから、覚悟しとけよっ」

「ぶ、ぶん、やれる物ならやってみなさいませ、無理でしょうが」

エドワードに多少ビビりながらも、言い返すセシリア

その後、暫くはエドワードは100%の作り笑顔のままだった

「ぶぶ、フフフフフフフフフフ」

―――絶対セシリアユルサナイ―――